部屋二咲線

完

へ13
2132
43

松七
神田菊町 五兵衛 北横町
樂善堂文庫
樂善堂文庫
樂善堂文庫
43
特 2132 43
81

月ゝ
むかしき
しかるに女房のごとく
けやう強くして物ものたれ
ども男ひとをのごと
さま
強くよく心ゆへしかどに居たる所の濃
ちゝ
ゝ強くもたちまぢめ性格
きく
とのごとし居ふ住まつべ住たるゝ場所

流女ものむらひ羽根ぐるぬるぐまぐろ
ものよのように引きを一切二切と切書し
作るこの中うふらびびるく体
ざ屏ぬのやくちるまるもも紙五古乃
たつつのこたうきすびけるしずこで
うれいち依日紀ちんどのよのつもきし

元すちるれ花れ紙とんりの所
ぢううう
女れもしてもんてかきつぐし
もちひぐ作てて作る
富ら宮九乃彩ふすむ
流女ものもの
ものもの書

子供屋

部屋三味線

○附見大意

近来清人ハ着すれの艶史多く渡り妓戸
媚門中国ハ蕃衍し蠻舶ハ及を知る其
書を閲ハ異域も本朝も人の情いつれのハ
ちゝ変る事いなきれども蕎くゝ出る好く
乃感いるるあり明乃世ハ小里ハ金陵と
いふ公の花街にして廓妓の風俗衣冠こゝ

志く銭　東方今の吉原のごとく又今度よ
清ひて一箇の外場西あり是ハ風俗倡人よ同
かして深花川の妓児ふ似たりされバよしハらを
深花川ハ風俗大かた同じかれバ麁しき又ひとし
かれバ情まども人情ハ一つまでハアく国もおい
らん金もむりしも今も途るところハ房ものれ
と来るの東ねし情まども又何ぞびの備が
ちがひもなきちかひりよしかるかう

深花川あのかわそびをするまへまづ初会から
まつそでからよく見通しせ油しと扱ぞりさばけ
おもきりの菓子ん酒とりんしいあぞんざい銭
をつくわそびとをはじるるき帯うるれどもよく酒
をすゝめ律儀の志くく帰るをふとといふ昼遊
ともとよ金納をだ毎ら帰りしてちらし川と
わつら屑よ根合千金乃背を散じあきびの
出来しもんの者ち寸棚乃間をぬすみくれ

寛濶一行乃一切にあそびよ年季十年の暮命
そのべる絲し姑質をん乃くをやく床へ上り
ちまりねる肩乃手拭銅子乃湯ぐく志ありて
湯乃くりを浩して肉帯を之くふめるなど
姿までを捨中よ為に浩まじべ金でうへうこね
ごみ治でうとう川ある浮花川よまうねる事
綴くのし和哥町の里遠もことそと事
ゆるく夜更小文よ帰るあるくてしもかくれは

なりけり此世やしなさきうる生帥買あのあそび傳者
なりける手芳原遊の風流よしるく撰ひ捨て冥土一万乗
の津法偈の雑乃数子のてこ記るめでと云を写し著
うわくりし撰き出まで娼妓の大蔵泥金画漆よう
とゝるく秋月の古今よりも停主母ゐてく上字あすり
是ぞ浮花川よ遊び法ませうらは中もか乃因
究局そうまく一厨子の撰のごふるはく八雲ん
分良てきるべ浮花川乃そんさう込にはん乃ぞ頃二

くるりいてこと〻ひつよ羅ゝ着一つ持て是ひろうれば
勿論ぜんそ〻て雷乃抱ちゝう跡のどく〻ゆ〻ちゝへ
や〻遠立らゝやいる妓児の床く〻ひ〻もたゆく
床とべにまきぬ法るまで是をまつ〻あの所ふ
へおやゝより遠つ〻ゆうみんゝとちまりかの
抱つ〻んの床納り抱ぜまん抱をゝべ用をとのろ
ゆりゝせ〻床入よ寄ゝ〻ふあとまでゝあゝ
んをゆるすよ抱ゝ漆の遊ゝやいん是を負図

罪の男ゝまゝまつ〻ゝちゝふとゝゝゝゝれがせゝ
う死なりゝまゝ〻ねゝもゝ〻ぬゝへの門を氣ゝゝま
ゝまとまちゝゝゝつゝ稼るんゝもこうおりゝへ
きゝう〻門ゝよおひをゝひゝ稼るんゝ蓮
もゝばゝうまでふゝつ〻ゝ風素山人是を指
ゝけ乃の先輩ゝゝゝゝの人情へはゝゝゝれた
いまで流花川の情同ゝ〻ゝおゝむき芳
東とゝ吳ゝゝ文勢をゝゝべッゝゝゝゝへ

扇をしらべてはちんどのごく清花川い
世ゑ扇をさんのごーこれが
清別をなすいくども初めきゑ白ちゃ
めんのいとしい白ちゃんの三おびの
遠ひの
○家も高ゑ紙の表清の門
俗なこ清よの大文字に福清と書ゑる枝戸の
てのの清三へ出屋てのにきゑそ金物の勉強日

ゑ国炉裏のよてよをてりゑゆくのたくも持く
さすがどうらく者のなゑ巣をく蜘蛛の二のてり
ゑ情ふうく部屋ちゃぶ上まどゑ初めのてゑる
と思をゑの格をそうじゃの風車ようよく回り
姫の門三人ゑうと伝ざんの服ゑる若ゑ神の
ゑうめへ極外のふんの数をど鶏一声鶏の巣
猫いちゑるゑ酸乃冷ようも実ゑ知恵の
服ゑいうせんだ門ゑの照ゑを新く貸屋

[illegible]同じの二編目と云へども小説の[illegible]一書の[illegible]
[illegible]の器入二ぐんと写ちがつて結てゝ[illegible]
[illegible]よりも[illegible]婦人[illegible]
門ぐすりらしく[illegible]
[illegible]と[illegible]
[illegible]の[illegible]
いつもとちがつて[illegible]
角力[illegible]

をぐるやはきはぎの[illegible]を完へかのこはぎ[illegible]
[illegible]のそんもとうづ[illegible]
なく[illegible]畑田神の白[illegible]
[illegible]
うつくしき[illegible]
[illegible]
[illegible]
まげ[illegible]

なぎまくらとさげ。はぶと寺面。ぐるり抜と
はきうるおぶ。ひつくだくいむすび。いがぐりまれ
ぶんをうこ流へ大海面のがつるおくしぼげこ髭ぶ
きりりだこの髭結をぬる天神結へ引りくく乃
どどんがうとさとぬくうぐんのかくさ天神。
おぐるへ抜くくだこ。おくひぐこの寄ぐひに
前ぐこを切せる。いのりかんこうへその日の出来
ふ生来ぐくく髪結のくきぐよはぶす明くく

うへうるよへうまくくそよこ洗へうまをよりロゴ
かくくく常をへうるよへさくいやさるおくる
酒おくりぐく赤ぶをのむるいきべ自だぐで酒を
ぐりよせるおくふぐひぐくく紙をくるこいれべ
いくんぐく新をうくくるみこ今ゆりくする寄れ
ゆれ紙このいごを極くる間くるみこ何まうき
川市乃なぐれくく夕方鼠とくる蝋燭乃
ぐりくきをいんぐうの抜ちよのこりだくく油四

よ油をとゞまてく苦界のうちよ沈とつゝせるだん
く科ハ推姫の男の一切を筆ふせりるゝるこゝみ迷ふ
権が縁乃ことをかしんだ皇后る乳穴を匠今朝
金門ほされる簡立ハ咲笑の侍よみ散形むげ
なる苦界の身もまゆの情とそとよかぞくく
らんる何をとく葉乃登きハら川夢ミ身乃
たちれきを観じ明昼よかしむ毎ちは夢をえ
るよつきとくも月日乃夜の際がくろうとあり

あら飛よあそとてゝる男ハ放鶴揺甲母のづうう
情をうるをドッピといふ宗やどゝをのて何それを
ぎつをあまとあうきつ務ぎぬくと絶桶のすくるよ
すぢとんがう小よ向ひくとのりざ床よと房る
限りも秋乃風さむくるよどもいとんな出たるひ
てハ何せん淋しきとそ乃中よりかくのごとくよ物そのとすもぞ
れるのころよりゐまそあしたこぶ事を気ちるよ隣ささをあきま
きとなれつき何よりまてく佳くひ身をくぐのよりくるふ気をせ
つまとく忘んを及ばぬくへおもうへ虫気病よきてくある生ずまい
のそのよおハ仏のかすつとく猶とのこその根をせくるあれくる此ハ

そこ迄ひろい口のうちあるこへ門よりかべは こわり〜 梅の〈 無言
すれくちのびた浮雲けなげやつをひく
いろごと手くるまならかけむかうま手だしい文字あんまを
いふはものの男じやとくも 然よ二ツへあるかよう
チヤンド 新まきにきまぜひ お松 梅そのさんどうぞ御川だり
悪寒(さむけ)がたる人業を二つりてあかせう おその アイサ
からだ肉よりの所がつぎ吹へかたふかちやとん
ともちがよふござひやとヨ ふびんやおそのハこえよほど みせぐるしうふうぐくぬそ
おりて出んじやうるてくぬしまでしきさまれ西へかへるけ仕まひ
その梅のげも梅と縁やくりとの毛ぬけくらうろきさあ

三伏炎(さんきうふ)の大ふくみ嬉てちをしてかるあへ中きつかれくる縁す
ぐるへだふゆうきへの夜風よおかすさぞくはねへひそうし
ろけちまたみして何せしくとろ白ひふくろの条ひもとまとめ
ふくろそすじうひにわ日何へかあるむねにうけよぎぬのされく
縁くぬさりがゆかりくおのりきこまかくを
何げうちるおごさくむそ乃ふぜん お松 さそさふさやしゆりけなんの
とつきや気をきつりとちとち縁へナ ああけさ
こうちやァいり縁へなよそのかわり こんなる
ゆきぬひて米ますふし 梅そ添しく云ふしや
よけれくどんな 浮ッうきでる 痿ッうきの
お家へとりもうつる命ひつひへるひのさ

おとの

ちんようくうつの高貴をもちこうつれ
ぜんぴ一度ハ下のふるづゝひいたりうちと血
くかゝぐゝくぬゆをもぐうこ出ゆくゝぐゝび
みぐうこ出地よ借金すゝ氣のもあてる
きえれるさかゝきんがきゝく用ゆうすを受
ゆゝふとつぷんまるいくゝるみつゝぷ
ぷう出へゞ出来ぬくゝぐうこ用よ
ねんゝるゝわんよきゝひとくゝるひと

さぐいきくぐうをさうこうちんざ乃
病氣をさいうとひたいりを死んで居ば
いうゝくゝひゆまぐまぐみ年行る年
季の用死んぐゝまんくよをんとうをてい
うまんちやうう使ぬとうふゝう ホシニ氣乃
くうぐだうりぐいまくゝみゆをのぐョ又
うれおくゝんり乃分ゝまくうまゝひのサ
けうよるぐよ位うぐぐかゝくの去ゝ出ふ

うきよ縁ありてわづか志んでいるに来てきたる
ゆうみ氣でもなく染ありめんや松葉が又ハ勤
をする内にもくらがりて素人ならなん內にハ女
郎でもほど縁へハあれや思ふらまぬとのやく
深きみのときをなさる外の内でハ世界ま
ぼくろみりのもまださせん明店よせ入てる所
宜のよどもやむどのざせんまめなぞそ
物をわるれば酒屋が内へ酒でものつてやと見

おさんも氣を付くれるみせへをでおまするさ
までふと思ひながら福清から出る子を
どうるみでもしとよく最屋も出当
家の評判もよしゆうよ勤る氣になるのと
いふハホンニいとどぶさんづされるお茶屋ハそぶさ
まへんも申ち付そり合だちうりざく済よもする
のさ　おまつ　そうまでならと商賣やのかくさん六
きちとござりてとら内へ申しますしひざるりでも

いろ〳〵なまくらはんざう氣のいてぢろうで
もとは孫〳〵のさ用はちおうこさんうのざゑこてう
よくつくうとうるねうみたるうう物ぐーいい
みそれいそうこいつそかすぐうろうひよ
ト かんさーをぶりつきくたこそんそ孫乃かすぐ
ちやこせんとうてつめのえでいこ
こものいまうべょうぬよのうきこうぬきうせこひ
おそのホンニはいこさんいどうしくこうまうのごのうぬ後蒔
もにふぐ廿一日ゆかこうぬをこんりやあーしこく

イタ
せどいこうのいきにくうこれぐわれ
孫ぐさえがひう
ト いふのうのごよ
おそのなぜぐ
孫いうぬぐうあうぬと孫をくさびひゆうで
ぬくうはさうのいかきくうこんそうふ豆のちうひ
をねんしてイタ
世ぬるどうこうぬ孫をたぬ世ぬ
人ようのうまくく世事をよく
ト いふいくさいう乃
ゆうふ孫にたまされやすよ
転うこア孫へ
その人こう孫のあれ世ぬ人こう去どんるりの

ゞめ給へ。「おちの」ものびてゝ二つの男山にまつとて給へ
りのさ雅ゝと云えんのゝちまでゞ初雪はあるべくとて
いつ男とゝもあり雅そうなゝ不ゝるれやすゞ
来うぞく出ゝうんれば中ゝ中ゝだうりで
ゝひ雅ゝちゝゞうく男づくでゝ稼づくてゝ金
づくでもゝゞづくでもうくからもくあるゝないい
そのまゝるゝ出いまゞだうりてゞ世ゝゝゝ
早でゝとり性ゞくうゝ今日あり先ひとうよ

うゝ寄で出世のゝゝもおりのゝゞゞあとゝ人とんゞ
がせいゞのゝゝけ阿弥陀院如来か釈迦さゝあゞ
おゞ二釈のいけんでゝゝゝひゝゝのゝいが女の
ゝゝひで減り雅くなゝるゝ今ゝゝゝゝが六
さんもうんのゝゝゝゝ「お松」其ゝゞの池さゝんと
かゝのゝゝゝ湯屋でゝゝうんゝゝゝゝゝゝゝる
ゝ日ゝゝゝ雅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝて
ゞゝゝくをゝゝ日ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゐるぞ稲（シミ）さんと、あんとがあれそあ乃
そでわらそそ　てうさをうとそれ稲へなおたの
うとそそ　ても赤稲へがとの八幡さんの祭の私
の事よおそそ　くよのひきてつれて稲て
いやーたがトかりてあぞうそいをあー
らてあべてあ赤いんぞうと富国うら名
ぞーて初金のいがかりふうとありいあをひー
を河出るがふつくいやぞくはうらうをを

はのて出あくとふとやーたが傷おおうみさんが
わるがうう姫けふきちとふとあぞうらうく
もいそをびーうぞをわうあをたて富
器へ出るが大一度のその中でさんの水
の魚がうーあるうがあるがあるがまりさ
その河まんぞで稲へとありあ本たうが生物
よくあるうでぞれるもうちへかんあさらは
とあ元のうる河へてさんのうしあよそを

家ふるいと新材うえてるくもりくるそのでうん
病いたのゆこのきまつさのと一府の女房
前ぬいてまてごうえてみもうれ〳〵ホンニ様の
あつとりのいかつおりのでかまとつ
ても家うおりてつとある家もなくつい病
がわけてその軒いまあ帰りでトへ送りてあり先
くつ三階へうけわが堂庫へそつとまつ〳〵ゲ
庫を揚よくつもあつとびあもひもあく稼る

とあつとあくのゆうが庫へくく家器へだくり
え入りこんでおくゆ今家図とのとおそのの
さんいるこそ出ようがいがすく新屋でみん
かゆもいえれるしたくさんきくと新んで
出ようでどいたそまわんまり来をくる
度ふあいてどうをあそも留をようふお
りをうとおりつて折ていい女前へ
どをして外へ出てあ今あるやとと

うそをついてはくつしたをぬいでたの
んでゐるぶりかそくさうに
そふとおりてと一度のかあかみをはいでもらさ
事をきくとあがりつてそのうめてしがら
みてくれとまをすむかどの女房(ゆうぐれ)
どものやうをおりいまやう(小袖)又一度の
多いもうあ〜あ〜おさ初めの内い紙(小袖)でい
やうものいがこぶるやうめがでれてい

中ゐれがしてもくかそろつて二階へはきさ
その中でおさんはおそをひきぬいて折ゐるん
暖かどもゐるいかがこそるてかをゐて
あるその紙もはきてかるてぎぬをりかーふ
義代をとつてつかそ仕事でせうがやうな家
をゐるいかがぎをせんかを初めの内六さんは
ぎをんこんんがおりてゐるかたが弟富氏を
いうまをの内かけものりてきるをんをやうな

ちいさい箱ぜんさまで、ごうきげんのいてぜんい
ともにんかりしろのもうで、ぬさいでおかえと
かぜう箱ふうつてあんどるもうふかつてきどう
でもちつとおちそいとうびふかり毎つて和ぐ寄り
ムりのうんぐあんだうりでまい息をつき新を
つき合ーて南じく志て新をありーやとと
ぐうらいくこのかのい初夏の門に溶き美ぐ人へ
ふもおる箱ぐあり年さぐ今でいうんかるきう

きてもナニ六さんの素の世とふなりふの
色の点のくいう狐でいう狐へぐ内はあ冠ちう
とせうふあつる鬼ぐあるうちる事さと
かくた箱ふるうこのもいあつ稲へうう
おうつる事さんとぐうう祝ぐむあう女尼
ぐちつとあうでもうるひと六さんより月ちう
ぐ狐うんてう年くなるもぐちゆへさ
六さんぐとそも学をひるつさあげくぐ

この夫ごろうどうが船頭をきぢんを
とり折ふしのんづまもつまい中でおて
おさめて見かどをかくしむかさんが
辞て来ていろまとこどもたちが
だち場をたもとよりぎろけはじて
くさいまけかしみもなくあやまつ涙
のもらひいのせいうふりまつがおばこそけ
ゆき付の先月中病気で板ひしてうつ

板の先生ぶんものあ一いぢかのつて来
かるのうちゆいまぐるゆ抑て出さ
のもさんぐでそのだんをさて見てあを
けうを出ゆかつて来ひかてみまを
くけしたうがあるを通のこと
あへてうくうあるうあ源ゆ一つ来
ぐんちあをかんが出ゆ一ナ二がおけり
さんかあをいきて来理だのりいをるうう

ちゃや主殿酒をしつらひてあとをかくせきの出
て手拍子のようにいとなんのわりあくも無[illegible]
つてゐるかなといやさんぐ町家くで酒田
も家ごつえくいろ商家のまん中を二ひ指で
おつらでい　おとをかの商ふこのあれ河内も商家な
さそくまつうつのつぷ[illegible]ぶそのの
たつけの者ばのとやそこでるぎあるまい
ぎやたくうんぶ海だら町ゆんとるりの

そのたくうまつるが色とうれがりのうつ[illegible]
おとの　わんはやそうサ六さん白まごよりくなれ
たくうとこといまなくあるそうぶが
うまをいがあるこのうを遊ひのお
面とうてあるかまつき合ゆ白まる
そうまをきうやせんをごうりちゃり
やのまありとたのさんぐりやとうれ
うも　高松　ヨやしるらりそ海りうまちよと

わるひ遊をさせ過ると嫉(たの)もてへげな
さてから娘へ心づかひ女房気もむつらくで
出地面へ借をかへして倉籍ある前が知る
娘へ雨でつまり退屈廻るでかゝるもいふ娘へ
ほのよそれからちと色(いろ)と出開千(ぢやうかし)の
おさる手はぞせみせん【おその】うそをいゝ娘へあく
も色々二度のうとあぶやあ娘はゝへ【お松】母様
懺悔(さんげ)ざかしぶらね今の事(こと)とは板がまくる

らみてゐるのサ庖丁(ほうちやう)が書みそみ申さうぞこゝ
ぬそもいて遊ぶと申したがいゝらいゆいても附合
で身がりそて飛んだ志ぶわ強賭(かさ)で数やせんその所から
縁人(えんじん)気まいて老人(きやうじん)があつて間座へ仕切をされ亦
荘土(おとど)へ出すしるちを仕兼しみ志そおくのさ
志う田舎(いなか)へつきてゆくやくそくで是の娘へ頼で
年季(ねんき)をねらせ團(だん)まてまんくり見(き)巫(こ)えの世
母と合せて家出(つまだし)して若満なのサその身(ぶそう)で今

はし若党をはるもいてはいまうだ様（ナント）おまの
唱をはるも久しいものぢゃうぢゃ家元の
ん言葉ふなんて遊びのゆうもをいるかうう
おめへかまはぬのんふうつてもつるまでそて
人様へ[写真]なるほどおめへいおまを入らげが
およさいご様へしまいどのくるるか家元とは
事ゲうるや言うたんちゃうまでも元で
いうるるまいまいうげてゆおあいう様へ

りのでは家元いおくめくろうと家元の元
やうかるうはうの外の家屋さはそのその家
の事は一寸遠ゆるはいはいのちんぞう家元
出てからゆうと入てあひの外ゆうはう元が
そうこんそう元よか家元ゆうはうあり
そうそうゆうはうゆうはうはうはうはう
ふくいのでこんな後のうのいい様へのあの様
お松 そのうへおまさいのの様へ家元でいうまあう

折がらく外の茶屋ふ出てゐる時分から嬶
分や女がきらひだによつてハ外でアノ子に
うつゝをぬかしてゐたが己備てこのやうに
なつたれど備る取が一寸逢ふてみたくなり畢
喜んでおりくせ嫌り身ぞんぶりとあるが
ものでな名代の子ハ内の事がらしかいつき
板をつくつてゐるとおもひ出してのんびりと出て
子もその手で名代ばかり寝るが出りあき

おかけて寝るもので、おれハ後のたくさんハ道
遊くないハ目をすりゆくうわさ乃
ところへさアわがすと思ふせんだいハ物會の部で
いや中だし廣元でもよんでわざみをおもふ
して其ニ逢せるがその晩をおもい遊び
といふものさわりいやでもいやさてく
名代をとつて空い目をすりのあるか
其サ文女ふ気の毒でもわつちのかた銭

まくゆてあり多くすてゝいて
かいて敷ぐはりてもこの種(ほうい)の家元も折の
ようにそなへつゝ高麗(こうらい)ゝ後ゞ
たつのさ 高麗のそまこいわのなかこちのか
ゝまつまくゆつてもの(ほうい)の茶屋(ちやや)へこうつ
くゆつて(ほうい)の新(しん)日のあつちと寝(ね)とこうて
ゆのかの高麗(こうらい)ゝ後ゞ立て
くゆつてまくゆのさかんまもれわさ

さんの茶屋(ちやや)へ新(しん)てゆ(ほうい)時(じ)のきれうなう
(ほうい)あつゝ月(つき)をとる(ほうい)(ほうい)も学(がく)のあるまで
とんぶつゝふりのぐがが敷がはてうゝやぶふ
アノてゆをよびまゝゆ町と茶元ゆ学せびる
小まゝこうちゝ押(おし)ひて高代のてれ
ひてさぶまてそくふ麻(あさ)をうゝをるぐ十人が
十人(じゅうにん)ゝ茶の形(かたち)知(しる)をるのでゆ歩ゝふ
きげんのゝりのサまゝもゝ茶元ゆまんて

言をとつていう事もうるさいなかを
了後をあけさせるはいとい折のうるさい晩の
仕向うこうもうるさい事でありまるもあるあるそのの
日をくふわやまつてゐる紙を出す事屋ちう
も差しいるを迎さうりまてもこの福阿分宿
をを迎まゆうを船乗元を内をとんをるあるも
用うあるの留もぐのいわやだのしつて迎福へ
阿いあんまりせんこのあいのぐうう

宿へ紙をおいてくるのサ　あまへ分を内
ちんのわどいふ　我分の内人をを地
外へ出ぐせりやとをいぐうやしまを
のつをちんてちまつとうこうをとうだぐ
いかうねとおいてやをとてをげ家中あるをも
きつとおるりのサをれでもこの福へとおうに髪
をきんてをるるがあるの福へこのの目中あを人
ををるふあへいりのぐ寿を抜て取ををて

一年とかぞへこんぐらく何のゆもきてのらい程へ
でこらいまを程きゃうあるまいよ　お松　仕舞を付
てかくなかいかぶよりもこられぬのあれば
うとぐてもあるどてこるものぐらひいちをて
始てあるからのきかあもかんでゆをこふ
ふあるあるあるとちうとりてかるるこれがあ
まぐらう青海を付ぐらはにはきて出るの
てかがあるいはうれ奥ものあるは食はあのかあ

それひろ近ゆりそびまてでひ迷ーにあるのさ
間を買も同ー茶屋かけ着でおるを始てあ
るあるあるあるこるもあれど外のあ茶屋
かはてあるを始て間ゆるちいあるのあ茶屋さ
さるの茶屋ちうのあるかるはうせもあく
ひられて外で茶を買てゆるもぐるまひ
ねあのあるものリ　お松　くるる二百三百おづをは
るるあるかるびはのあの遠いのサ　融亂のをを

きんちやくにはすこしきんでねたしい文ならりしか
きうてかずらいなりしみ中して外の子はまだ嘘(うそ)ばかり又
日もぶんおかにはあまり出し銭してもまたいやう
とて子供氣もなくあんなさゐおもてうはちらぬ逆舟の
追(おひ)かけが来て里内へも聞ゆるとて手紙が
きたり一度は友達(ともだち)氣が違ひても去らずして粋
なるぞそうやとおもひてどうぞ寄り合ひ一文
れ(だて)中の者を(を)はなれてなふかとくるめさせその

遊(あそび)も尽(つき)て藝者をよびて見徳(けんさ)なく酒をのむう
とおもひとつかれてさめて寝(ね)る里は日も又日も
見かりとおもひの見世をかけるなやさといふ事か
てもれくの銘くなやさといふ気でもなく酒喰(のん)
か郷(くら)て女房持ではわるものでその気は
とおものサ居續(いつづけ)の気をとめてゐる内はよ
めへのはらぶの事でらくなのやらぞその咽(のど)く
外へ出すがとんだ汚れもののサ 【お松】又酒飲者の

産婦の息をはかりて調べて見ればこら
して、ねたまゝにて【かゝへ】いろいろ仕方でさへ物
へよせつける手をのうなき気も産婦はものゝ
ゲこ腰を撫へ【かい抱】いれて抱と自分とへんの遠
ゆゑよ抱のうちも気いてあへのちのだとおもふ
そうへ付をしてからて業屋で熟の無の
いろいろおもて自分ありやア何のいた処より
おやア撫へといふ手がありてめへにとゆくのらひ

みゆるのさま見て一周半を付て往立へゆくとても
舟底のゆるんの立へ左右股袋でもちてゆくもの
お世帯おもて半分ゆり御所の外むすふ用
るうは諸番撫への中、五番の骨立より腹の字で通
中て御命をる時ばかり抱の身かすぐ小き業
産へ産婦の用を康をわけさせて又外へ出をき年や
顔を来りの荒気の物合わせ小も出させてある
と、おやおのうえへおして数さて壹いつもとおもへ

てアノ女帝元日く年ばかりて鏡ぐらを枕でるつ
いて様子をおぐれいいなぐらいなぐらいなぐらい
自然ばかりなぐほどこの[illegible]
ごぶをんおくんいちたてこと入也年度ア
ばかりてもこまるぐ自分をいかと金語をする日
中ごろ地の方元ばかりなんやくてみぐいる
りのぐくく抱のうちぐ元のもうあいぐかりても
つうう稲ハナどこの年度でも書ばや娘分に

上ぐをばかりてあう稲と海人ぐうち出ばかりお
なうあもの外のうちを出ばうちいぐもあるのサ
アノ近ぐのうて地坊ぶ年一ふるうを待ておる
時一度ばうん年年一ふるあるてとうさぐるハ拾
好のうちりのさるイ出ばかりぐ元でもなぐふるうる
てくうて廊屋や髪結ばうん借が出年ぐを
を帰ばうま想を知うまてうちまてうん稲動
宮をぶ廊内を住借ふやアいう稲ばうぶん

が聽を出さとしんて日おあ海へまるも円でゆ
あべちやわ小田びのめへにあるしいら茶屋ぐ
たべるあもまろちんがかどこのあ元の像てもを
者ふしやづまだやるんのうてもあるやさるい
かんの かんみ抱の円いてあのの田らで絵へような
ものでうてもあるのうまだ〳〵和哥所おと意
ほっる色の初舎おてあわ宮う田ぶるの酒よ磯
ておるのと我まをうてゆ絵のゆ表神樂

なでもさて城波のて業屋でやう海〳〵
いてとや話をおつさけててもも屋へうるうて
仕まうよんふるもあるうるうるうるう意ぶよの
るもあるそうさ 松 そんかのうてかるへ海世
ぶやあなりやせんまぶ〳〵書赤〳〵天大
きしてこちらい勤いて西ふあ元ようを色と嗚
出ると遊びのれてげ遠ひ抱と自筆を書くしてる
おゆの見ふるるのサ おんの ホンニヨ帰りやあようよ抱

の内いつくしがるくちをあかしてとくとみるに
さてはなんとてらんて婦分やはなかたてはまる
うらまつく正月の社前白義貝をこれをうつの
さ鬼を清水の法服をいとら晒して掛の清水を
いろいろ出しさいてのあるとまでとおさ
れでもしたはなをおしてふりのさモシ
おとこの子みをとて晒元のおとこ鬼へ如来元
わどけつく為りが和ゝうで学のうるかりのれ

ろうそくを抱うり自分のうまかるとでいかまもたて
うりが出来抱うりおかりとわがありやあるう
[おれ] どうしても至ら神へ内のおまの一人りに二人出
くどうるとてナンどのふるあうとの金ぐあ
のサうまも元もお宮のおとかるのうしてある
とどうわサ [おれ] 為もの袴のぬぐとるあり
もお宮のきゝんがこうるゆくいとりやとが
お宮うり社員の近きゆんだぬづ

い稲〳〵 [おれ松] わるいこゝろ沈屋なりとゞもこれ
げこんか人ごゝろうゝサごこの沈屋でもこのくもの
のあるものサ町ゑでもしてのいうとそ稲まれ
る〜結ゑだり家てわてつん稲〳〵てらいき
の稲〳〵よりふうとくいの下海衣なでもちゆんと
こらしておいてもこんのうるのうの出来ところ
つ稲〳〵内ゑ見ぶあつん見をして待てゐる
もホンニ黄昏よりゝいろものサだちつてごゝん

の法き合いゝゝ揺籠をうきうごして波を出来
こゝり籠をあつ屋ゑよりするも寝をうく
かんのゝふゑていうとおうをでう稲つるめく
のいりゝゝげさんたく義ごゝゝ人の裁ゑのい
りゝ城とりちゝゝ家でとりかゝかて
出ゝゝゝゝゝゝあいわかゝきて家屋のうて家
ゝゝ海出てメゝてゝゝあうみ稲〳〵たゞゝ
いりゝいゝゝゝゝ見ゝゝのかゝまる

ようなぶたくもわりこ形姫ぎりをさく
もいのりいぐ法さきちがひたん人ようきざるのサ

おとの 又記者元も若宮ぐれ貝書ぐ記けてうう
ねここ
ちと寝ぬうう出るのの仲間でようくもう神へ
ものぐ女房てをりつうたまえ元の鶴でもうを
うう極へげうをわおうう元でそうう元も貝元をか
せぐてをりの刻ぐうるひうう寝ぬうたでイ
一日者物のいうをのぐふかびをそおうぐ何

うはこ者りへいなーこのあ元で二朝うら一貝ふ
はぐ明んて出うきら極でそんるう雑ても喰ふ
というあの元ひ女ふ元者元ぐ雑うた出る貝
高貴づくといくをぐうう元あたのたでイ 御松
ないんでわうう来屋の内でも雑る日もあり
ささ
淋しい日もあり元者元のお宮の家ふ入る
ぐいふりのうりやさんん雑貴もその日打宝サ
一ッ円のうをどもで仕箱ぐあわうり貝ふをあうう

ゆてあつけくさん稲のほで板がうんかうれて
ゆきまつゆ中の新屋の稲ひとり稲まてゆるゆ角ちんちんも
のこホシニ勤成ゆきつりの稲でゆんでゆ浦くて寝ね
けたり稲のゆたといゆ遠ゆでゆんせん

おその

モシむゆ新米を雪ゆ雪ゆ新米ゆらもあるゆえてへ
ん貧をもるゆ家ゆ稲ゆ

おれ

ゆ新米ゆ元と
いりのゆえてゆ米ゆ家ゆうゆとくてゆ
ど元のゆ米ゆくきゆゆでゆんもゆ法

ん法りゆきてくようできゆ稲ゆりゆ

おその

新ゆ米
河ゆ西ゆ茶屋の若ゆ元ゆアリゆ河度ゆと
思ひゆゆるゆう元ゆ河ゆだゆらりゆ元ゆん
ゆ世ゆとゆ元ゆ米ゆ河ゆて水ゆ場ゆ米ゆて
米ゆ元ゆ西ゆ月ゆ月ゆ貧ゆてゆてゆゆ元ゆと
ゆ米ゆどゆもゆゆゆゆひゆゆでゆゆゆゆゆきゆの
稲ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ稲

おれ

ゆ地ゆ元
て新ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ元

のあつて我等中でも気の寝ておる座敷へ説出家を
赤さ若者気がきれくどく事があるのさ二三度より
三度恥をかゝせてもきかぬ極へ何八男人を引
留てあるくなつてから酒やから六年が
ありやしたが是非物事ありといふ人さ［おとの］ごとき存
せよる嫁かなや女気八お宮の男人窮が身を下さと中
ゆるしがた中でも気もおかみの男人よふがわらふ極へ［右松］
男気八百人百色でござんすがいつて男人よふ

葛若楽といふもする男八大方酒のうへ男にあるものぞ
遊びも大風にのる々で座中をさわぐ外後て意
なりをとまがたくていよのかり抱でござんせふがよたん
ぼうに酔まて座で極て喜まづ八お宮者や女房気の
身にとめて八らまでしくれへのさ極て酒迷さ
るかならもわて中八物やせんがいろも出がや
に遊ぶ八ちやどうく生身をそるときてくら気も指
にあるこよいしお宮八いやさ事　私や抱さへ

[illegible]

いろいろ置てぜひ[illegible]ふたりの外出帯

結やい[illegible]

其うちより[illegible]

同[illegible]のかたお宮参り[illegible]

[illegible]の三度りて仕舞の相場酒を[illegible]

つうとせ[illegible]

[illegible]

の三ぜ入の屋つきの扇[illegible]

[illegible]

むとしてぶ[illegible]

いまあるいのサ

[illegible]

ある[illegible]

[illegible]

だ[illegible]

[illegible]

[illegible]

ぎのようふのえんをはのうちへとまりてとんでゆ
かれぬ。ふかめるまゝ。ふかめるまゝ。ふかめるまゝ。
のけはいをゆめにしるのみなりのサたの船も寝ぢ
み動てうへにそけはうらねがまゝ。ゆく〳〵つけ
寝ゆくるのさつまあ寝ときゝさまのゆめん
でくるかゝゝがれのとゝいやとがこゝろいよまろ
くるよふふるふふ寝もよく出たのサいまゞる
出かゝまもなく船中へ人数とゝのうりのなども

ぎてゝゝ山〳〵ちせんの海ゝより
あまりゝ出ゝ山〳〵このまゝ人〳〵ちゝるか
ゞゝまてゝるとゝその数をたまに出ゝてあき
ゝ友達ゆもゝ人をゝまゞゝきこゝ分ゝいゝ海ゝ
いゝのあゝゝるのゞゝいゝのゝ沢ゝきゝいんとゝん
ゞゝゝゞゝたのゝゝゝで月人〳〵ゝ所をつまてきてよりて
るゝゝりそゝんをたゞゝるゝのまゝ山〳〵ゝ所〳〵ゝもゝ事
をたくんてつきてきてのゝゝゝのゝたのんで

おくとまた二度もうら畑をあらためて
うら畑に見ぐ迎くなんつて見ればとてつるかまぐ
ゴうらねとぶーい見の遠い所ちまで
べなるあ場なんてのまをやめてあんたなる
合ふとと輝ばりしたなんてとうく庶の入婿
ぬとこいあをゆぐ稲のサ　おそを　又名をあいあの
ぐきいくうでえんのあるのぐ下さあ元で稲へ
お松　その家二人色で家ちなんとんあるぐ出ぐり

その家の人（サ見通シ）ふ大わぐてをかさ泊のは
おぐ抜きいて人てとうくい義者元や女元を
はきるあくきあて庶ふりあ母ねうで庶
麦ぐなぐのサどのとり合ゆうぐりをい出
こふのあ元ゆ小婿なんてまのはれてあるぐ
こうちのあサ又母ふぐ嫁りくいるねとの
風ふあ元を初舎ふくうあ蓋をさぐいてうきく
ぎうくを一度ふやりあぐ三うり嫁りふりあ

をとこ[illegible]のことの[illegible]の若衆の情を知る
ゆゑ人がみるとふる[illegible]あるを[illegible]庫へとりてゆく二度の
庫ふとりてゆくを可てまくの庫ふるぞみ
[illegible]つくいなの通り若でごぜをも[illegible]ホ三三お客い
お客らひ[illegible]ゆゑ[illegible]稼ひ[illegible]新[illegible]
[illegible]のぐ[illegible]たくて[illegible]で高雲屋の見形元ゆ外へ
遊よいきむてるぐ素[illegible]会元ゆ初て遊ゆ[illegible]
のまゆゆ水がりゆ小ゆ[illegible]稼わどけつく

[illegible]ぐ[illegible]ゆ[illegible]ゆ[illegible]ゆ

そうさ出ーかるうて義経者共よび和を料理番
あるひは（あるいは）跳者（はねもの）ばたらきのうまむざうかあんべ者よ
さいわいのようなれ（あれ）ばまてそうらいをたてる
ものだからてもこれ方もよくさ稽古の者
義経者ども入こんであるが中ゆ（なか）ゆ（から）ゆ（から）みーく
ゆてあるもゆんげ（ゆんげ）ゆうてきてつくあるうこてき
稽古で所変きこで義経者共も勢出ーや食
遊の最の為ごこでもあるこんぎを祝（いわい）のぐらい長
時（とき）ゆ（から）支度の酒ゆ（から）枝（まき）ゆんで勢（せい）うこ味噌を入る
と隠（かくし）の茶屋（ちゃや）へもうこうぐらく者ゆ（から）どもゆぎ
やうでございまいちぐ内ゆ（から）ぐさみ中の
よなぐらいゆ（から）時（とき）ゆ（から）義経者共ゆんで大さうぐふ
さろこと酒さいでゆるこの者ゆ（から）こんこぐ家拵ぐ
ようゆ（から）そうんゆ（から）ぐようこて所変のりそるゆ（から）めさたぐ
義経者ぐうゆ（から）いこゆ（から）ゆ（から）ゆ（から）ゆ（から）ゆ（から）ゆ（から）ゆ（から）ゆ（から）ゆ（から）
のこいこてもさそうぐうまーぐら稽古のめで

女郎衆もよのなごきてきてるこさてるこさてるこさ

宿の同じ事にて法師ばかりの稚ばかりの
男同士にも男女のサガ男女にも稚女
ばかり遊びもなく女物會小一所の中で
その宿の家のまたもつてまづ元服を
取もんばかり拾んで湯りえんがいやでなんぬ
さてその事にて三三度ばかりの事
ばかりの長切とおもの内かのうの物武士
まいりが出まてかりうとおもふ動くしいの事ば

おもしろくなく物ばかりで初めはあるお遊ばで
ありさ宿がのうらうらかぶくかんてかのの事も
あいふいつのまびそのてまの物くかんさえん
ねのてうちかてかくせ服をして茶屋中も
あくりのあるうあるてんりまびも元も
いくかりうへてうえそもえオ本ある海さうう本
なりとかうでどのてまもよりしてもおりかくもど
とあくかびみのとこどう三ばかりて又を

るの事(こと)きうとうあつてくるものサ[さとの]やけふ
あるさ者共(しゃども)[おれ]商賣の内くら迄まるのさ
連もなく樂遊びて居のさとやすていさのこ
るべくも元もうあそびむり酒をのんでつま
びん迄出してもどる[てんぐ]ぢ[ちう]ぢ[ちう]ぢ[ちう

身の嘆かいとこの三法のようゆゆしへ仏の御
若労か能つきあはせり同さへこがんてされ
おのづから面目あり友達ゆも恥てさなきあふ
なりと遊びも当てふこふめで所作業うさ
無いきづけの結構とのあるけんが出るのは蔵
てもなくでもなかん西月いあるうさせきその
あ元もおり法いでいなく形くやあふ
なんてくるのどうも出るそうひなあさ

遊びの合といひのい事柄をとるものの思へ変中
ふかんつて法の久しびなく夢うあるもの
ふひの外義務の出来るのなれど楽の為
たらんあさんぞとと当てあい部こく
ぎりとあるを借金の骨がらとあるる
のサ是も一生の徳高價夢我人とのき
らめるうり外い当人も福へのさ　それを
情状賞ごろもの商業ごろく罷めもあり

やとそのゝ（がモシ）庵をどうかまたのこれば（ばの）ちかごろ（ろ）あるう
祖（お松）ソレとやども元ハ一ふの新二ふ庵三ふのもと
ヤやとの新のいたそのゝ庵はれたれ芽で見ふるる
さねまうなるの庵てお宮をこゝろもとゝ出ふん
ぬがありやはるものわるふさしてもあるの押地
て出をとゝもいるのサ今でハ庵ゝでおくて
ハさりやせん碁橋和尚町おくりで初舎に
帯（おび）ばとくるふなりやたもの浪乃まゝさ

（お松）あのゝるふきゝあうもいうがなるおがつ祖（そ）
といふゝやるのどうれ（お松）それハ合（あう）と紀ゝ同ゝであ
いてゝお宮の新をゝ入ゝ庵（あん）のきゝとあるゝサ嵐（らん）も
そゝとするようハ祖（そ）とゝ元ゝよゝゝて情（じょう）のる
いようふ思ゝりのサ縁（えん）の沼（ぬま）をゝ紙（かみ）て条（じょう）い
がゝさ面（めん）貴（うき）業（ぎょう）ゝとゝておくと合（あう）河（かわ）かゝ
匂（におい）てゝあいゝその法（ほう）きるりゝがゝうゝ元ゝをゝ入ゝて
庵でゝゝゝら祖（そ）がいのサ法（ほう）痛（つう）貴（うき）八（はち）日（にち）ゝ

おちの　蛙　嬢二日いらんかのだしの事又濁酒を
湯へわかしてこの人で出るとなどがあるとうれば孤
といふのの角へ湯へて神棚へもあをとしてあるの
だらうに水をとるとらずかしてたちの罪なる
孤へ庶の事ことのの湯のこれ出来あれ又庶の孤
うらいの事がかまる孤へ　おれん　出来の庶の都まき
びのでなるの夢なれ人で庶へ出るとりまく毒
いさいの出来毒出の出でいたで孤へ切者か

出来の事でうらいの事でかんま食い勤をするの
れて和ごとヤ出でが女のおさ海へたつたのだ
そかかりの財産がらそげ法　おれん　ふるやり孤と
かりんでうら女房元の女房元ちんさいるの
きらいなりのかホン三孤のこ　おれん　雪出一ツ海りぎりた
一ツ出りまへのつそる津戸してさ人あべてこが
みをて庶をあけだ部ひ出ても家小やる海
きくいそまる沢もなく庶の事い茶屋舟宿元

もいと長くてもいとまさの長くてもいとまさの
いとめかるらまさのいきさをうるハ福へ（おまつ）で紀
福へかもつけがごぜいまさ何のでお嘆いてお人へ
何のゝ意ハ福さで身のあるお人へ久〳〵遊ん
こゝろんぐ人へかぐこゝいぐまさ出まるのさ（おまつ）
おそいくもんみようらまでぜ女房持ハ去まる福へ
家元の情のあるお福へをなしてえ人をそ
金で紙をとんで去面へてかまてらえアイと

紙をゆる向背をむけて寝てゐて去だくこゝろ
をむるゐかきへと情がるよ（おまつ）そよの顔へ
うつむけかをへて泣ゐんをゆるゐをとり見てゐる
ぐいかを家の息づくえもんがてゐるのサ貴庵ゐ
涙こゝりゐのぎをおく牧屋をかゐ福員球さゐ
さゐいうけうゐりえぐゐる向廣間をしうゐるし
去まへてゐる向福をうゐてくまてゐる岩
元へ床所のおえ福へのゆ（ゆえの）虚でおゐを

ころも妻もいがきてそ【おれ】いそうえて
よくいそぐらい飛さえをいてお宮の景あて
こうもくもいく年の志のいんとのおぐらあれの女を
枕のやうくるあるのをおさつてくえ花ちの
のうえのやへ志うを【おんの】そうりてどんをるへいの流
【四】アイ　おれくうん富図へ出まるとおいてそぐうかえ
やくよ【芸者の遊の】播磨【ボヲン】【高人】始やくあぐり
冊畢

○附言

夫黴瘡下疳便毒結毒之病近世尤盛而貴賤男女罹之者十居其半是和華一轍。蓋承平酣歌之都會。人人樂安佚內則膏粱膩味。常充口腹遂生濕熱瘀血外則沈匿柳巷花街。以動蕩淫火一釀成此病。遂傳之娼妓男娼則娼妓男娼傳諸人也。不知

其幾千百或傳之妾或遺之孫甥
而終身爲癈痼之疾豈可不恐謹哉
予非醫家是雖非所關姑記爲世之
鑒戒噫房勞野合者深戒之戒之

一名曰 杯燈会 遊僊窟烟之花 全一冊 同出版

揚花水性 浮華川容氣 全一冊 同出版